

「近頃、關さんはどうかなすつてよ。ぼんやりと居眠りばかりなすつてるのよ。」と、關さんと席を並べてゐたAさんが、眼を圓くして仰しやるのでした。あのお行儀のいゝ關さんが教場で居睡りをするなんて、そんな事がある筈が無いと思ひましたが、氣をつけて見るとそれは本當なのでした。

「關さん、關さん！」斯う先生に注意されて、はつと吃驚して顔をあげる關さんを、私達は度々見ました。皆、くすくすと笑ひ出す、すると、關さんは、消え入り度さうに眞赤になるのでした。

そればかりでは無い、關さんの御様子には不思議なところが澤山ありました。うるんだ様な眼を神経的に光らしてひどく苛々としてゐる關さん。何事かを思ひ詰めたやうな顔をして、他から聲をかけられてもろくく返事もなさらず、或る敵意を潜めた表情で、冷た

く澄ましてゐるやうな關さん。さうかと思ふと、何でも無い事に泣き出したりして、半日休養室に俯伏してゐるやうな關さん——。今までの關さんとは全く打つて變つたさういふ關さんを見ると、私達は本當に不思議に思はずにはゐられませんでした。

「關さん、どうかなすつたの。どこかお身體でも悪いんぢやないの？」斯う私がかかります、關さんは見る／＼眞赤になつて、

「いゝえ、何でも無いのよ、何でも無いのよ。」と早口に仰しやつて、やるせなさうに溜息をおつきになりました。

今思へば何と云ふ迂濶な事だつたでせう。この寫眞を見ても、この通りはつきりと判る通り——この眼の邊を御覧なさい——關さんは、その時もうお母さんになりかけていらしたのです。居睡りをなすつたのも、妙に神経質におなりになつたのも、皆そのせり——



つまり懷妊の爲めの變徵だつたのです。

で、この寫眞を撮す時には、關さんはもう退學の決心をなすつたのでした。而して、私達の友情の紀念の爲めに、これをお撮しになつたのでした。

けれど、私達はその時は一向そんな事は氣がつかかなかつたので、先生から、關さんは退學なすつたといふお話を聞いた時は本當に吃驚致しました。あんまり私達が苛め過ぎたか  
らではないだらうかと、密かに胸を痛めたりしたものでした。關さんがいらつしやらなくなつてから、私達は私達にとつて關さんがどんなに大切なお友達だつたかがはつきり判つたやうな氣がしました。關さん一人を失つた事は、外のお友達の十人も二十人もを失つた程の淋しさを私達に感じさせました。殊に私と野口さんとは、いつでもそのお噂をしては關さんを懷かしがたり、何故あんな態度の關さんにとつたらう、何故もつと關さんを庇

護つてあげなかつたらうと、大變その事を後悔しました。それにしても、前にはあれほど仲好くしてゐたのに手紙一つ下さらないのはひどいと、私達は思ひました。郷里にお歸りになつてから、關さんは一度も消息をなさらなかつたのです。

關さんが阿母さんにおなりになつたといふ事を聞いたのは、私達が五年になつてから間もなくの事でした。

「まあ、關さんが——？」と、私達は驚くよりも寧ろ呆れました。私は、小さな嬰兒を抱いて、子守唄を歌つてゐる關さんの面影を描いて、不思議な氣がしずには居られませんでした。「あの關さんが阿母さんに——。」と思つた丈けではそれが逆も有り得可きことではないやうな氣がするのですが、さうして描かれた想像の畫面には、あの小さな可愛らしい關さんが子を抱いた一人の立派な母として、何の無理も不調和もなく浮び上つて來るので



した。

私達が愈々五年の課業を卒つて、その證書の授與式がもう二三日に迫つた時分でした。關さんがお亡くなりになつたといふ報知を耳にしたのは。

その時の、驚きと悲しみとは、こゝに申すまでもありません。

私と野口さんは、相變らずの仲好しで、卒業後の方針なども打明け合つたりして、卒業の記念の寫眞も二人丈で撮りましたが、その寫眞を撮る時二人の胸に同時に浮んだのは關さんの事でした。

「あゝ、關さんはもうお亡くなりになつたのね。」斯う私が云ひますと、

「私の可愛いサアシャ、可愛い黒子さん。」と、野口さんは、關さんに對する昔のあの濃かな愛情が、今、その胸に溢れて來たのを抑へ兼ねるといふ調子で、

「でも、生意氣だわね。阿母さんになつたりして——。而して生意氣だわね、もう死んで了つたりして——。」と、言ひましたが、その眼からはとめ度も無く涙が落ちて來ました。

これから愈々本當の人生に出て行かうとする、而して、暗いやうにもあれば明るいやうにもあつた、海とも山ともつかぬ前途を望んで希望と不安とに胸を躍らしてゐたその時の私達の心には、早くも一生の運命を見盡して、妻となり母となり、するだけの事はさつさとして死んで了つた、關さんの事が連りに思はれてならないのでした。今でも、矢張時折、あの方の事が思ひ出されるのです——。申し忘れましたが、關さんがお亡くなりになつたのは年弱の十八の春だつたのです。

(完)



姉



美紗子は、今日云はう今日云はうと思ひ思ひ、つい、云ひ出しそびれては、一日一口と延ばして行つた。此の二三日、急に騰つた暑氣の爲めに、母の容態はどうもよくなかつた。で、美紗子は殆どその枕許に付ききりにしてゐなければならなかつたので、實際その隙も無かつたのだが、しかし、漸くその機會を見つけても、どうも、うまくきり出せないのだつた。

「須美ちゃん！」と呼びかけて見ても、

「なあに？ 姉さん？」などと、無心な顔附で問ひ返されると、あとの言葉に困つた。

「須美ちゃん！ お話があるのよ。」やつとこれだけは云つたが、



「何あに？」と、その圓い眼をみはるノンセンスな須美子の顔附を見ると、美紗子は、何か知ら自烈度のやうな腹立たしいやうな気がして、

「まあ、須美ちゃんたら。何を食べてゐるのさ。」と、心にも無い突慳貪な調子で云つた。

今、社から歸つた許りの汗ばんだ顔をして、解きかけた袴の裾をひき摺りながら、口の中なかで何かもぐぐとしてゐた須美子は、一寸はにかんだやうにして、

「お菓子——。こゝにあつたのを一つ頂いたの、でも、お腹が空くんですもの。」と、甘えるやうに云つた。

「お腹が空いたら御飯を召上れ！ 立つて食べたりにして。」と美紗子は笑ひながら、「いやな須美ちゃんね。もうお嫁に行かうつて人が——。」

「いやあだ。私、お嫁になんか行かないわ。」

須美子は、腹立たしさうにかう云つて、つんと横の方を向いて了つた。美紗子は、それでまたすつかり出端を折られて口を噤んだが、實際、こんな子供のやうな人に、結婚の話など飛んでもない事だといふ風にも考へられた。が、また、その子供らしさの何處に一人の男をそれほどまでに惹きつける丈の力が潜んでゐるのだらう？ と思ふと、何だか油断がならないといふ様な気がした。さう思つて見れば、揉上のあたりからかけて、ふつくと寸の延びた横顔にも、なよやかな線を描いた肩附などにも、未だ彼女自身は意識しない自然のなまめかしさが匂ひ漂うてゐた。子供だ子供だと思つてゐる中に、いつか美しい娘盛りになつてゐる妹の姿に、軽い驚きの眼を睨りながら、美紗子は、何となく裏切られたやうな心持と、妬ましさに似た或る心持とを感じずにはゐられなかつた。

「姉さん、母さんはどう？」袴を疊んでしまつた須美子は、小さい聲で、かう美紗子に尋



ねた。

『え、今日もあまりよくないやうよ。でも、今は、よく眠つていらしつてよ。』

母は丁度眠つてゐるし、あの話を持出すには、今が一番いい時だと思つたが、何だか妙に心持が改まつて了つて、容易に口がほぐれなかつた。

『ねえ須美ちゃん——』

『なあに、姉さん。』と、須美子は飽迄も無心な様子だつた。美紗子はまた言葉の纒穂をなくした。自分の事ではなし、何故、こんなに言ひ出しにくいのか。何が、こんなに言ひ出しにくくなるのか。美紗子には自分でもそれがわからなかつた。『阿父さんが自分で話せばいい、私に話させようとするのは、無理だわ。』——何となく、さういふ氣がした。

その晩、須美子が、病人の爲めのいろいろの買物をしに出て行つたあとで、父は、美紗子に問ひかけた。

『美紗！ あの話をもうして呉れたかい？』

今、すやくと寝入つたばかりの妹の幹子を膝の上に抱へてゐた美紗子は、眼をあげて一寸父の顔を見上げたが、又伏眼になつて、

『え、未だ。』と小聲で云つた。

『向うも急いで居るんだし、母親に話すにしても、一日も早い方がいいからな、ひとつい早く話してみても呉れ！』と、父は云つた。

『え、私もさう思ふんですけど、いゝ機會が無いものですから。』

『一寸一言云やいゝんだから。』と。父は、不機嫌さうに云つた。美紗子は、その父の言



葉に何といふわけもなく、軽い反感を感じた。人の氣も知らないで——とでも云ひ度い様な、うとましい氣がした。で、

「矢張、阿父さんから話して頂いた方がいと思ふわ。」と云つた。

「俺が話す分にやわけは無えが——とつくりと彼女の心持を聞いて見度えから。それにや矢張お前の方がいと思ふから——。」近頃ひどく太り過ぎて、心臓を弱くしてゐる父は、せい／＼と喘ぐやうにしてかう云つた。

美紗子は、それには答へなかつたが、父が須美子にばかりさういふ優しい心づかひを見せて、自分はどうでもいゝ者に見てゐるやうに思はれて、悲しく恨めしい氣がした。自分の願ひをば、あんなに素氣無く斥けながら、須美子の事だといふとこんなに乗氣になつてゐる。それにはそれ丈の理由がある事は十分に判つてゐるとは云へ、何だか、自分にばか

りつらい父のやうに思はれてならなかつた。妹が姉を越えて先に嫁に行くといふ事についても、「お前には濟まないが——。」などと口では云ふが、一體が香氣な父は矢張何とも思つてはゐないのではないか——そんな風にも考へられた。

「一つ、今夜にも話して呉れろ！ 病人の番はおれが引受けるから。一緒に散歩にでも出かけて行つて、ゆつくり一つ話して呉れろ？」と、父は、飽迄も察しの無い調子で、せかせかと云つた。

「はい、今夜は屹度話します——。」さう答へた自分の聲が、ひどく露んで、而してぎこちなく硬ばつてゐるのに美紗子は氣がついた。父も、それに氣がついたと見えて、

「本當なら、こりやあお前の方が先でなけりやならねえんだがな——お前にや實際濟ま無えんだがな。」



さうして、これほどの良い縁は、さう澤山あるものぢやないから、とりはづし度くない。瘦せても枯れてもおれの娘だ、へんなところへはやり度くない。今立派にやつてゐる昔の仲間への手前にも、娘をあの位のところへやればまづ顔が立つ。それでなければ、勿論こんなに急ぐのぢやないが——と、辯解らしく、今までもう何度も云つた事を繰り返すのであつた。

『いゝのよ。阿父さん、そんな事。私、何とも思つてやしなくつてよ。』と、美紗子はかう打消したが、何だか自分の心の底をすつかり見抜かれたやうな気がしてはづかしかつた。而して、『私何も、須美ちゃんを妬んでなんか居やしないわ、些ともそんなさもしい心持をもつちやゐないわ。』と、心の中で自分で自分に囁いてみた。

『須美ちゃん。一寸、出て見ないこと。』

かう美紗子が、須美子を誘つたのは、もう九時過ぎてからだつた。須美子は、餘り氣が進まなささうだつたが、姉のあとへついて出た。

銀座の通りには、ぞろ／＼と散歩の人が續いて居た。明るい灯に浴衣の袖を翻して、何か口々に笑ひさどめきながら、肩をすり合せて練つて行く人々の中にあつて歩いて行くと、美紗子は、眼がちら／＼として、頭がぼうつとなる様な氣がした。もう二週間も母の枕元につききりで、殆ど一步も外へ出なかつた美紗子には、此の賑やかな夏の夜が、何處か遠い國へでも來た様な物珍らしさで眼に映つた。

二人は手を繋ぎ合つて歩いた。須美子は、快活な調子でいろ／＼と話しかけたが、美紗子は、時々氣の無い返事をするだけだつた。



「……………」  
ふと、美紗子は立止まつた。今摺れ違つて行つた男——それはTでは無かつたか？ 美紗子は振向いて、その躍る眼で忙しく人混を掻き探つた。しかし、それらしい姿は見えなかつた。

矢張さうでは無かつたか知ら？ だが、今自分の片頬を掠めて行つたあの一直線に射つけるやうな、物狂ほしく燃える眼は、確かにあの人に違ひ無い、あの人でなければあんな眼をした人はない——。美紗子はさう思はずにはゐられなかつた。

Tには、もう一月の上も逢はなかつた。この十日ばかりは手紙さへ一度も出さなかつた。Tが、どんなにいら／＼としてゐることか、屹度、今夜も、たまらなくなつて、此方へ出かけて來たのに違ひ無い。——さう思ふと、どんなにしても探し出して、一眼でも逢

はずには居られないやうな氣がしたが、否、矢張別の人だつたかも知れないとも思ひ返された。

「姉さん、どうかなすつて？」と須美子が、歩みをとめて、一寸袂を引張つて、此方の顔をのぞき込むやうにした。

「いゝえ。」と、美紗子は一寸うろたへて、「何だか少し頭が痛いのだ。」

「さう。何だか顔色がよくないわ。看病づかれなんだわ、きつと。」

「……………」

「——本當に姉さんも大へんね。私社の方を少し休まして貰つて、御手傳ひしませうか知ら？」

美紗子は、矢張、Tの事を考へてゐた。母の枕元にある時は、忘れるとは無しに紛らさ



れてゐた。又、瀕死の母を前において、さういふ事を考へる事が、何か罪深い事のやうに思はれて、つとめて抑へつけるやうにしてもゐたのだが、かうして賑かな人通りに交つて少し放たれた心持になると、しきりにTの事が思はれた。それは戀しいとか懐かしいとかいふ心持では無かつた。あの一人でじり／＼と燃えてるやうな、狂氣染みた人はどうしてゐるか？ 自棄を起して酒でも呑んでゐはしないか？ ——そんな事を思ふと、美紗子の心はたまらなく不安になつて來るのだつた。

『姉さん、もう歸りませうか？』

須美子にさう云はれて氣がついて見ると、もう雑沓の中を出外れて、街路樹の根の草花が飾窓の灯に目立つて、絶え續く足音にも更けて行く宵の静かさが思はれるやうな、

淋しい人通りになつてゐた。美紗子は、自分一人の物思ひから覺めた。而して、今夜こそ話して了はなければならないと思つた。

『あゝ歸りませう。河岸の方から歸らないこと。』

『あゝ、さうませう。』

新聞社などのある、暗いひつそりとした街を抜けて、二人は河岸通に出た。一ぱいに浴衣の人を乗せた電車が一臺風を切つて走り過ぎた。黒ずんだ濼の面には、黄いろい灯の影が幾筋も長くのびて、涼しさうに揺れてゐた。

『須美ちゃん！ あなたの社に高野さんて方があるでせう。』と、美紗子は何氣無い調子で話しかけた。

『えゝ。あつてよ。』



『どんな方？』

『どんな方つて、よくわからぬわ。』

『いゝ方なの？』

『えい。深切な方だと思ふわ。——どうして、姉さん、そんな事をお聞きになるの？』須美子は一寸足をとめるやうにして、斯う問ひ返した。

『實はね、その方からね、結婚の御申込みがあつたのよ。で、須美ちゃんは何う思つて？』

美紗子は、自分の聞が少し震へるのを意識しながら、一息に斯う云つた。

『まあ！』と須美子は小聲で叫んだが、一寸間を置いてから、『そりやあ、あの方はいい方だと思ふわ、でも——。』と、云ひかけて口籠つた。

美紗子は、須美子が案外平氣なのに一寸拍子抜けのした氣がしながら、後の言葉を待たが、須美子は黙つてゐた。

『その方からね、一月程前から熱心な御申込みがあるのよ。で、お父さんはね、もうその方にお逢ひになつたの。さうして、いろ／＼調べて見たりして、お父さんはいゝと仰しやるんですけど。——でも、須美ちゃんの心持もよく聞いて見なきやいけない事なんだから。』と、美紗子は姉らしい優しい調子で云つた。

二人は肩をならべて、橋の欄干によりかゝつて、水の面を眺めてゐた。須美子は、矢張り、黙つてゐたが、やがて、

『あの方なら私いゝと思ふわ。でも、姉さん——。』さう云つて、須美子は、物問ひたさうな眼で美紗子を見返した。美紗子は、その時はじめて須美子の思ひ違ひに氣がついた。



而して、思はず頬を火照らせながら、

「須美ちゃん、あなたの事なのよ。あなたに結婚の御申込みがあつたのよ！」

「え。私に？」と、須美子は驚いて問ひ返したが、「私になんて——私になんて。——そんな事無いわ。そんな事私知らないわ。」と早口に云ひながら、袖で顔を隠すやうにした。

「いやな須美ちゃんね。何を間違へてゐたの？ あなたになのよ。」と、繰返して云つたが、美紗子の頬は、益々赤くなつて來た。苟にもそんな風を間違へられた事が、ひどく恥かしい事に思はれたのだつた。

「でね、お父さんも氣が向いていらつしやるし、須美ちゃんがいゝとお思ひなら、嫁つた方がいゝと思ふわ。」と、須美子が何時までも黙つてゐるので、美紗子は返事を促すやうに斯う云つた。

「でも、私未だお嫁になんぞ早過ぎるわ。それに姉さんが未だなのに、私の方が先に嫁つて法は無いわ。」と、須美子はやうやく落着をとり返した調子で云つた。而して、「私、姉さんの事だとばかり思つてた——。」と、呟く様に云ひ添へた。

「だつて、私は、須美ちゃんの知つてる通り家を出られ無い身體なんだから仕方が無いわ。私は駄目だけど、須美ちゃんだけでも話がきまればお母さんも安心なさるし。——お母さんも、もう長くて二月か三月、此の暑さを越すのがむづかしいかも知れないつて、山田さんは言つていらつしてよ。だから、早く話を定めて、せめて須美ちゃんの方でも安心させてやり度いとお父さんも云つていらつしやるのよ。」

「でも、私未だお嫁になんぞ——。」

「だからね、直ぐに行かなくてもいゝの、唯約束さへ定めて置けば——、御婚禮は、半年



や一年、待つて貰つてもいいだらうと思ふわ。』  
 須美子は、黙つて考へ込んで居たが、美紗子の掌の中で、須美子の手は、小鳥のやうにふるへてゐた。

『ぢや、姉さん。姉さんも御約束だけしてお置きなさいな。而して、姉さんの御婚禮が済んだら——そしたら——。』

『駄目よ、私の方は。』と、美紗子は抑へつけるやうに云つたが、その顔には、淋しい微笑が浮んだ。

『駄目な事は、須美ちゃんだつて知つてゐるくせに。』

『私からも、ようくお父さんに話して見るわ。』

『いゝえ、須美ちゃんなどがいくら云つても駄目！ お父さんは些ともあの人を信用して

下さらないんだから——。』

『でも、私、ようくお父さんに話して見るわ。』

『いゝえ。その事なら止して頂戴！ 私の事と須美ちゃんの事とは別なんだから。』と、

美紗子は命令する様な強い調子で云つた。妹の口から頼んで貰ふ——殊に、妹の婚約を利用して父を動かす、などと云ふ事は、彼女の意地が許さない事だつた。此の小さい妹から、すこしでも氣の毒がられたり心配されたりなどはしたくなかつた。

『私には私の覺悟があるの。だから、私の事など氣にしないで、須美ちゃんは須美ちゃんでようく考へてね、——私、いゝ御縁ぢやないかと思つてよ。』

須美子は、又、黙り込んで了つた。



『もう、少し考へさせて頂戴。』さう云つて、須美子は、翌日になつても、又その翌日に  
なつても、はつきりとした返事をしなかつた。

『どう？ 未だ決心がつかなくて？』美紗子が態と氣輕な調子で、こんな風に問ひかけると、須美子は赤くなつて、おどくした。さういふところを見ると、矢張、未だ子供だと思はれた。

はつきりと返事をしないけれど、須美子はその人を好ましく思ひ、その申込に對して心を躍らしてゐる事は慥かだつた。須美子が決心しかねてゐるのは、自分に對する遠慮からだと思へると、美紗子は心苦しかつた。どんな意味に於ても、妹の運命に邪魔する様な姉

にはなりたくないと思つた。

『須美ちゃん。ぢや、私、お父さんに云ひますからね。思ひ切つて決めてお了ひなさいな。』と、美紗子は命令的な調子で、かう切り出した。三日目の朝、須美子の出勤前だつた。

『だつて、姉さん——。』と、須美子は、ちらと姉を見上げてから、やり場に困る眼を膝の上に伏せた。

『私からお願ひするわ。決心して嫁く事にして下さいな。』

『……………。』

『さうして、お母さんを安心させて上げて下さいな。お父さまも乘氣になつていらつしやるんだし、私も、大へんいゝ御縁ぢやないかと思ふわ、さうすれば屹度須美ちゃんは幸福



になれると思ふわ。』

『姉さんはいと思つて?』と、須美子は小さい聲で訊いた。

『え、本當にいゝ御縁だと思つてよ。大さうしつかりした立派な方ださうだし、年の釣合も丁度よし。ね、決心してお了ひ! 私、お父さんにさう云つてよ。いゝでせう、ね、いゝでせう?』

須美子は、眞赤になつて、さうして黙つてゐたが、その眼には一杯に涙が湛へられてゐた。それを見ると、美紗子は、急に須美子がいぢらしいものに思へて來た。而して、その肩に手をかけるやうにして、沁々とした調子で云つた。

『屹度幸福になれてよ、須美ちゃん! あんただつて可哀さうだわ。女事務員などになつて、小さい時から苦勞して。私、何時までも須美ちゃんに會社通ひなどさせて置き度

くないのよ。』

美紗子は、自分で自分の言葉に引き入れられて、涙ぐましい調子になつた。丁度、家の悪くなつた時に生れ合せて、一番楽しい筈の少女時代を會社勤めなどして、貧しく乏しく過して來た須美子も、考へて見れば可哀さうな者だ。此の可哀さうな妹の爲めに、心から幸福を冀はねばならぬ、と美紗子は思つた。

三

母の病氣は引き續きよくなかつた。家事一切の處置、病人の看護、その上四つになる妹を母代りに育まねばならぬ美紗子の此頃は、随分忙しかつた。須美子は會社へ、父と、須美子には兄になる弟の讓治とは、朝から近所の工場の方へ出かけてゐた。父は、五六年



前までは自分で工場を有つて、大勢の職人を使つて獨立してやつてゐた塗師であつたが、或る手違ひから、こんな處に逼塞して、今では他手に渡つて了つた其の工場に、他の使用人として働いてゐるのだつた。皆出拂つて了つた家の中は、ひっそりとして、時々、奥の四疊から病人の咳の聲がした。

むづがり泣きに泣き寝入りした妹に幌蚊帳を掛けてやつてから、美紗子は、一寸柱時計を見て、時間の過ぎてゐるのに驚いて、勝手元の水瓶に浸して置いた薬瓶を盆の上に乗せて、母の枕元に持つて行つた。

『どう？ お母さん。』さう聲を掛けると、母はぼつかりと眼を開いた。而して、ちつと美紗子の顔を見つめるやうにして、

『あゝ、今日は少しいゝやうだよ。』と、微かな聲で云つた。母は、容態を聞くと、いつ

でも『今日は少しいゝ』といふのだが、衰弱の加はるのが一日毎に目に見えた。げつそりとこけた頬は透き通るやうに蒼白めて、唇にも色が無くなつた。吸口から薬を飲ませたり額際の汗を拭いて上げたり、寝返りをさせたりすると、母は一々、『有りがたう。』と云つた。

『有りがたう。本當に美紗ちゃんも大へんだね。お前、この頃顔色が悪いが、どうかおしなのぢやないかい？』

『いゝえ。』

『氣をつけなくちやいけませんよ。——よく消毒をしなさいけませんよ。』さう云つて、母は眼を閉ぢて、暫く、苦しさうに喘ぎ乍ら黙つてゐたが、だしぬけに、

『お前、その人に逢つた事があるのかい？』と云つた。



『え？』と、美紗子は訊き返した。

『——その、須美子の旦那様にならうつて人にさ。』

『いゝえ、私はお目にかゝつた事はないの。』

『どういふものでせうね。——お父様は大へん氣乗がしておいでだけれど——。』

『私、本當にいゝ御縁だと思ひますの——しつかりした方らしいから。』

『でも、未だあれはほんの子供なんだからね。——それに、須美子よりも美紗ちゃんの方を先にするのが順序なんだから。』と、母は、低く抑へるやうな聲で、しみじみと云つた。

『えゝ、でも——。』と美紗子は口籠つたが、繼りついて、嘆き訴へ度いやうな弱々しい悲しい氣持が、又、その心に歸つて來た。

『まあ、それで兎に角須美子の方は安心だがね。』と、母は、すこししてから言ひ出した。

『美紗ちゃんの方はどうなんだえ？』

『私の方つて？』母の言葉があまり唐突だつたので美紗子は思はず赤くなつて、どぎまぎとした。その細い聲が美紗子の心には雷のやうに強く響いたのだつた。

『思案に餘つた事があつたらね、お母さんに話しておくれ！ 美紗ちゃんは一人では考へ込んで居る性質だけど——私と同じやうにね——。私にだけは話してお呉れ、さうすれば私がよろしくお父様に話して上げるからね。』と、母は、仰向いて眼を閉ぢたまゝ、獨言のやうな調子で喘ぎ／＼云つた。それでも、美紗子が黙つてゐるので、一寸眼を開いてその方を見やるやうにして、『何かお前考へ事があるのだらう。』

美紗子は、どう返事していゝかに困つた。一切を母に告げて、此の日頃胸に包んでゐる悶えを訴へようかと思つたが、しかし、母は氣こそ慥かだがもう明日にも知れぬ人だつた。



母に話したら、母は屹度自分に味方して、共に父の心を動かすやうに骨を折つて呉れるであらうが、あの頑固一徹な父は、一旦あれほど手強く斥けた願ひを決してもう容れては呉れないだらう。それは、結局潮死の母を無駄に苦ませる事に過ぎないに違ひない——。

『いゝえ、お母様、私そんな事はなくてよ。』と、美紗子は、とつてつけたやうな、まづい返事をした。

『さうかえ？』さう云つてちつと見上げた母のきれいに澄んだ眼は、『皆、知つてゐる。』と語つてゐるやうに見えた。『何故、隠すのか？』と詰り問ふ様に見えた。美紗子は座に堪へられないやうな気がしたので、茶の間の方で妹がむづがり出したのを機会に立上つた。幌蚊帳を除けて、その傍に添つて身を横へて、

『どうして？ 幹ちゃん。さあ、ねんね、ねんね。』と云ひながら、軽く叩いてやつてゐ

る中に、美紗子の眼には又しても涙が浮いて來た。美紗子は、今朝久振で受取つたTからの手紙を思ひ返した。もう、一月もあなたに逢はない、あなた無しに生きる月日がどんなに苦しいか、どんなに辛いのか？ 食べられもしず、眠れもしない。思ひ疲れて唯茫然としてゐる。あなたの愛を信ずる私は、あなたを冷淡な人だとは思ふまい。けれども自分の餘りに激しい愛の前には、あなたも亦冷やかな人に見える——そんな事が例の投げつける様な調子で書かれてあつた。而して、最後に、もしや貴方に逢ふかと思つて毎晩銀座の通りを歩いてゐるが、一度も逢へない。東京の炎暑は、私の頭腦を狂はせさうだ。思ひ切つて旅に出るつもりである。旅に出る前、一度どんな事しても逢ひ度い。兎に角、此の手紙には返事を下さい——と書いてあつた。それは、痩せ青ざめて、眼ばかりきら／＼と輝かしてゐるTの顔が、その文字と文字との間からちらついてゐるやうな、思ひつめた心持の



手紙だつた。

美紗子がTを知つたのは、未だ美紗子が女學校に通つてゐる時分の事だつた。一番仲好くした友達のN子の兄さん——それがTだつた。美紗子はよくN子の家に遊びに行つて、Tとも前から顔馴染になつてゐて、顔を赤めながらも、二言や三言は口も利き合ふ仲だつたが、美紗子が、そのTから愛せられてゐると知つたのは、N子が死んでから後の事だつた。N子は十七になつた年の初めに、流行感冒から肺炎になつて、僅か二十日ばかり病んで死んだが、最も深くその死を悲んだのは、Tと美紗子とだつた。而してその悲みが二人を結びつけた。Tが美紗子を妹の様に思へば、美紗子も亦Tを兄の様に思つて、時々、

訪ねたり手紙のやりとりをしたりしたが、やがて、Tの心が妹としての愛に満足しきれなくなる時が来た。それは美紗子の十八の夏だつた。其時分、美紗子の父は、三崎の城ヶ島に家を借りて、夏中は家の者を代り代りに避暑に遣る事にしてゐたが、Tも美紗子達のあとを追つてその鄙びた避暑地にやつて来た。而してTは未だ十二三にしかならなかつた須美子や、その弟の讓治を相手に、毎日呑氣さうに遊んでゐたが、ある日の夕方だつた、島の燈臺の下の岩蔭で、美紗子はTからその愛の告白を聞いたのだつた。

『でも、私、貴方を見さんだと思つてゐるのよ。本當の兄さんだと思つてゐるのよ。』美紗子はその時、眞赤になつて震へながら、ただかう繰返したが、實際、美紗子には兄とより外はTを考へられなかつた。戀といふ事も夢みないではなかつたが、謂はゞ唯戀を戀する丈で、實際に戀をするといふ事は——まして、その對手がTであらうなどといふ事は、全



く思ひもかけない事だつた。美紗子は、Tのこの不意打にすつかり脅かされて、唯、  
『でも、貴方は、兄さんなのよ。——唯、兄さんなのよ。』と、繰返す丈であつた。

『貴方が僕を兄さんと思つてゐても、僕は貴方を妹だとばかり思つて居れないから困る。』  
Tは、激しい羞恥の爲に引歪められた顔に、苦しげな笑ひを浮べて、胸の底から押し出すやうに斯う呟いたが、その晩の夜船で東京へ歸つて了つた。

あんな事を云つて、美紗子さんは驚いた事だらう。抑へても抑へても抑へきれぬこの煩惱が、たうとうあんなことを云はせて了つた。僕が悪かつた。あなたを妹より外の者に思ふのは悪い事だ。あの清らかに死んで行つたN子の靈の前にも——こんな風に書かれた手紙がTから來た。その手紙を受取つた時、美紗子は、病氣で寝てゐた。その夏の持病の胃痙攣に苦められ通しで、折角の避暑も楽しい日は一日もなかつた、年齢の割合には無邪

氣で、まだ少女のやうに快活だつた美紗子も、此時分から漸く人間の苦しみを、苦い涙の味を知り始めた。美紗子は島の燈臺の青い灯を眺めながら、東京で病んでゐる母の事などを考へて、わけもなく涙を流したのでつた。

それまで、Tがよく呉れた手紙も、それからはばつたりと絶えた。あんな事があつたので此方からも、訪ねる事は勿論、手紙も出す事も憚られた。美紗子は淋しかつた。而して、捨てられた人の様な恨めしさをさへ感じた。が、その年の秋の上野の展覽會で偶然Tと逢つてから、美紗子は又、折々、Tを訪ねる様になつた。Tは美紗子の訪問を喜びはしたが、いつも憂鬱な暗い顔をして、時々、淋しい重い微笑を漏らす丈であつた。美紗子は、自分が媚婦の様にTを苦しめつゝある事を知りながら、——而して、それを悪い事に思ひながら、矢張Tを訪ねずにはゐられなかつた。



『兄さん、いらしつて？』

一月に三度、一週に一度位は、さういつて顔を赤めてTの部屋の前に立つた。Tはその時分繼母が不快だと云つて、家を出て、同じ山の手の或る素人下宿にゐた。而して籍を置いてある××大學へは殆ど出ないで、一日中閉籠つて文學の本などを讀んだり、何かちつと考へ耽つたりしてゐた。

そんな風で半年が過ぎ一年が過ぎるうち、少し宛少し宛、美紗子の心は動いて行つた。而して翌年の夏が巡つて來た時は、美紗子は、全くTにその心を捧げる人になつてゐた。女學校を卒業してからは、一週に一度宛近所の花の師匠の處へ通つてゐたが、美紗子はその歸りに、よくTの許を訪ねた。而して一時間、三十分、或は僅か五分間をそこに過したが、折々は、思はず時を移して、夜になつてから歸る事もあつた。

『私、矢張、兄さんのやうな氣がするのよ、』美紗子は未だそんな事を云つて、Tを怒らせる事もあつたが。しかし、二人の間には、結婚といふ實際問題が持出されるまでになつてゐた。『大丈夫よ。お父さんの方は何ですけど、お母さんは、よく私を理解して下さるわ。而して屹度、私の願ひをかなへて下さるわ。』美紗子はさう云つて、連りに不安がるTを慰めてゐたが、その美紗子が唯一つの頼りにしてゐた母は、その頃から、病床を離れる事の出来ない人になつて了つた。一番末の幹子を産んで、すつかり身體を毀したところへ前からその氣のあつた肺が悪くなつたのであつた。美紗子は、未だ乳離れもしない幹子の爲めに、母の役目をしなければならなかつた。その上、益々暮し向きがいけなくなつて、女中を雇ふ事さへ出来なくなつた家の爲めに、主婦としての務めを兼ねなければならなかつた。かうして結婚の話などは當分成立つ見込はなくなつた。せめて母にだけは、すべてを



打明けて置き度いと思つたが、此の場合、そんな話を持ち出す事が、何となく気が咎めるやうな気がして、美紗子はたうとうそれも言はずに過して來たのであつた。

美紗子は、一言も母には告げずに來た。けれども、母はそれを知らなかつたであらうか？

絶対に美紗子を信じ切つてゐた父は、繁々と美紗子に來るTの手紙をも矢張女學校時代の仲間からだらう位に思つて、格別氣にも留めず、「お友達の處へ寄つて來ました。」と云へば少し位歸りが遅れても、怪しんだりなどはしなかつたが、しかし、それも初めのうちだけだつた。それ丈の物思ひをちつと押しかくして、些とも氣取らずにゐようといふには美紗子は餘り正直過ぎた。

『何だか姉さんは此頃へんよ。』などと、心も體も眼實際の、感じ鋭くなつてゐる須美子が先づそんな事を云ひ出した。美紗子は仲の好い須美子とつまらない事から口争ひをはじめてほろ／＼と涙を流したりする事などがよくあつた。

『をかした姉さん！』須美子は、その思ひがけない姉の様子に呆氣にとられた。『本當にかかした姉さんね。此頃どうかしてるんだわ。』

それに、一寸と云つて出かけて、夜遅くなつてから歸るやうな事も、一月に一二度宛位はあつた。——「どうしても五時迄に歸らなきやならないの。五時過ぎるとお父様が歸つて來ますから。」などと云つても、Tは、「もう少し、もう少し。」と云つてひきとめた。

もう花の師匠通ひも止めて了ひ、従つて訪問の機會が少くなつた丈に、Tは、美紗子を歸したがらなかつた。病氣で寝てゐる母や、懷を求めて泣いてゐる小さい妹やが氣にかゝ



りながら、美紗子は引きとめられるまゝについ長居をした。こつそりと家に歸つて、未だ父が歸つてゐないと、美紗子はほつとして、

「母さんは？」と小聲で須美子に聞いた。須美子はいつも素氣ない風をして、ろくろ返事もして呉れなかつた。

「つい、遅くなつて。」さう云ひながら、おどろした心持で母の室に入つて行くと、母は工合よく眠り入つてゐる事もあつたが、まじく〜と眼を開いて、いかにも待ち焦れてゐたといふ様子でゐる事の方が多かつた。

「あゝ、お歸りかえ？」と、母はしかし物柔かな調子で云つた。

「あの、つひ遅くなりました。」と詫びると、

「——もう少し早く歸るやうにおしよ。今日は未だお父様は歸らないやうだね。」

早く

着物を着換へてお了ひ。お父様に見つかりと又うるさいからね。」などと母は云つて呉れた。母は美紗子の辯解をそのままに受け入れる風で、別に、何所へ行つたのか？とも、どうして遅くなつたのか？とも問ひはしなかつた。が、それ丈に凡てを見抜かれてゐる様で、美紗子は何だか氣味が悪いやうな氣がした。而して、病氣の母にいろ〜と心配をかけてゐる事を心から濟まないと思つた。

癡癡持ではあるが、案外氣の弱い父は、蔭でじり〜する割には、面と向つては小言を言はなかつた。時々、激しい勢で責め詰る事があつたが、美紗子がほろ〜と泣き崩れたりすると、却つてなだめ賺すやうな態度に出た。又、美紗子がちつと思ひ詰めたやうな青い顔をして、口元などを引締めて、ろく〜口も利かずにゐるやうな時は、傍へ寄つて



来て種々機嫌を取つたりなどした。その事だけを除けば、美紗子は健氣な忠實な、近所でも賞められ者の娘だつた。病人と子供とを抱へて、一家の事を何から何までやつて行くのは、若い娘の身にとつて一通りや二通りの骨折ではなかつた。くらしむきの事などには全く無成算な、といふよりも無能力な父は、美紗子がさうして母親代りにとりしきつて居て呉れるのでなければ、その毎日がどうにもならないのだつた。だから、父は平常から美紗子に一目も二目も置いてゐた。で、美紗子に對する不機嫌の捌口を、母親や須美子などの方にもつて行く事もよくあつた。それをよく知つてゐるので、美紗子は一層辛かつた。

Tが、美紗子の父に、美紗子を貰ひ度いと申し出たのは、去年の暮近くであつた。今のところ私は家を出られもしないし、逆も聽かれる見込はなさうだから——さう云つて、美紗子は未だその時機で無い事を説いたが、Tは、たゞ約束だけでいゝから、と云つて自

分自身で美紗子の父の許に出かけて來たのであつた。が、結果は美紗子の心配した通りであつた。それに、直に至誠を披瀝しようとして、直接に自分でそんな申込をしたTのやり方も、昔氣質の美紗子の父には、唯或る不安な印象を興へたに過ぎなかつた。

何時からあの男と知合になつたのか？ とか、どういふ男だ？ とか、父は根掘り葉掘り美紗子に訊ねたりしたが、

「美紗！ お前はだまされてゐるんぢや無えか！——もう決してあんな男と交際つちやいけ無え！ 何をされるかわからねえ！」苛々した調子でさう云つた。美紗子は、父がTを不良青年か何かのやうに思つてゐるのが口惜しかつたが、云へば云ふほど自分の心持が辱められるやうな氣がしたのでちつと押黙つてゐた。すると又、父は、

「それやお前には濟まねえなあ思つてゐる。いゝ縁せえありや直ぐにもやり度えなあ思つ



てゐるが、何しろ、母親はあの通りの病人だし、幹子はお前の手でなきや育た無えし——。』などと訴へるやうな調子で云ひ出すのだつた。

『いゝのよ？ そんな事、お父様。私、お嫁になんぞ一生行かなくてもいゝと思つてゐますから——今、直ぐどうしようなんて、誰が思ふもんですか、誰がそんな事——。』

『兎に角、廻り合せだと思つて辛拘して呉れなきあ。』父が打萎れたやうにして、そんな事をいふのを聞くと、美紗子は、自分が、親兄弟の事などは關はず、唯自分だけの事にかまけてゐる世の中のいたづら娘などと同じに見られてゐるやうな氣がして、腹立しくもあれば情なくもあつた。

そんな事があつてから、父の監視は一層嚴重になつて、手紙を貰ふ事も出来なくなつた。





訪ねて行く事は尙更難かしくなつた。一寸買物などに出て、少し手間取つたりすると、もう横町の角のところに、幹子を手おぶひにした須美子が迎へに出てゐた。

「四丁目まで氷嚢を買ひに行つたのよ。いつもの處に無かつたものだから。」などと美子は辯解するやうに云つたが、さうして一々の行動を見張られてゐると思ふと、堪らなく腹立たしかつた。又、そんな風に須美子などにまでおどくどくと氣をつかはなければならぬ。い自分を考へるとなさけなかつた。而して、さりげない様子をしながらも、ちらりと横の方から疑ひ深い眼を光らせてゐる様な須美子を小面憎く思ふ事もあつた。須美子はTとも三崎で會つてよく知つてゐた。未だ子供だとはかり思つてゐたが、あの時分から何も彼も見抜いてゐて、種々と父に告げ口したりするのではないかなどとも邪推されたり、またもう少し、須美子が大人であつて呉れたら、自分の今の心持をすつかり打開けて、力にな



つて貰ふ事も出来るだらうに、などとも考へられたりした。

さういふ中でも、しかし、美紗子は一月に一度位はTと會ふ機會を作つた。行き會ふ場所を打合せて置いて、歩きながら話す爲めの五六分を偷んだり、幹子を遊ばせに出たついでに、一寸その下宿に立ち寄つたりした。

『此の子があるから、此子は矢張私が無いと育たないんですから——それで父も私を手離せないんですよ。』美紗子は、見知らない處へ連れて來られて、一泣き泣いたあとの眼を不思議さうにきよときよと動かしてゐる幹子を見ながら、こんな風に云つてTをなだめたが、Tは、

『この子一人位僕等で育てたつていゝぢやないか。それに今直ぐにといふのぢやないんだ。』などと、苛々とした調子で云つた。Tは、あの申込みを拒絶されてから、すつかり

絶望して自暴自棄染みた調子になつてゐた。情熱的であると同時に、その場その場の感情に支配され易いTには、どんな苦痛にも踏み堪へて、ちつと思慮深く時を待つ丈の意志が缺けてゐた。而して、一緒に燃えて呉れないと云つては、美紗子の冷淡を責めたり、美紗子の愛の誓ひを疑つたりした。

『さう貴方のやうに仰有つても——』さう云つて美紗子は泣き出す事があつた。自分の心に包みきれない辛さ苦さを訴へようとするその人が、却て、此方から慰めてやらなければならぬ人である事が、美紗子には此上もなく便りなかつた。單純で、而して善良である丈にそれ丈に又頑固な父と、駄々子のやうな男との間に立つて、美紗子は一人で苦まなければならなかつた。



## 五

高野——それが須美子に求婚した男であつた——の遠縁に當るといふ五十許りの、官吏上りらしい上品な老人が、三四遍目の足を運んで來たのは、美紗子が須美子にその事を話した日から三日ばかり後であつた。父が留守なので、美紗子が代つて返事をしなければならなかつた。

「私ども、御覽の通りの姿で御座いますから、——もうほんとに野育ち同様なんで御座いますよ。裁縫などの方も、もう少し仕込んで置きたかつたので御座いますが——。」などと、美紗子は姉らしい調子で話した。

きちんと行儀よく坐つた老人は、靜かに扇を動かしながら、一々、「はゞ」「はゞ」と丁寧にうなづいて居たが、その膝頭のところに眼を落して一寸口籠つてから、

「お姉さまがまだお片附きにならないのに、さしこえて妹御の方をといふのは、誠に無理な願ひでは御座いますが、——實は最初、何も存じませなんだので。」

「いゝえ、もうそんな事は——。」と美紗子は一寸赤くなつた。老人の、思ひやりの深さうな柔かな眼ざしに、或るなつかしき感じ乍らも、此の人からまで氣の毒がられて居るやうなのが、妙に辛い氣がした。で、その氣持を押しかぶせるやうに、

「母が病氣で臥つて居りますし、それに、小さい妹が一人御座いますし——私はもう到底家を出られない身體なのですから。」美紗子はさういつて淋しく微笑した。

「お母さんの御病氣はいかゞな鹽梅で？」

「どうもあまり良い方では御座いませので、もう長くはないだらうと思ひますが、——



せめて妹の方でも身が固まりませば、母も安心しますでせう。』  
 『大きに。』と、老人は大きくうなづいた。が、それからまた高野の人物や、経歴や身分やなど、美紗子ももう父から傳へ聞いてゐる種々の事を、ぼつり／＼と話した。而して結婚や婚禮の細かい事については又改めて御相談にあがるからと云ひ残して去つた。それと行き違ひに、須美子が社から退けて歸つて來た。

『お客さま？ 何方？』と、須美子は、そのまゝになつてゐる座蒲團や茶道具などに目をとめながら聞いた。

『當て、御覽！』と、美紗子は一寸擲掄ひ顔になつて、『高野さん、今日どんな顔をしていらしつて——。』

『いやだ！ 姉さん！』と、須美子は眞赤になつた。

『愈々御返事をしてしつたのよ。』

『……………。』

『大變な秀才ですつて？ 今の人こそりやあ褒めてゐてよ。須美ちゃんお目出度う。』

須美子は、箆筒の陰のところにかくれて了つた。

『須美ちゃんの快活な無邪氣なところがお氣に入つたんですつて。』さう云つて笑ひかけた美紗子は、須美子が、袖を顔に押しあてゝ泣いてゐるのに氣がついた。

『いやな須美ちゃんね、何泣いてるの。え、何泣いてるの？』さう云ひながらも、美紗子は、直ぐ自分が妙な心の弾みから、はしたない調子で物を云つた事が恥ぢられた。

無邪氣な快活な須美子は、がらりと人が變つた様におとなしく、おとなしくといふよ



りは、涙つぽい娘になつた。一寸の事に直ぐに顔を赤めたり、おどくしたり、妙に氣が立つた様な顔をして、ろく／＼物も云はなかつたり——さうかと思ふと又、その涙ぐんだ様な眼をあげて、何か斯う、憧れ夢みるやうなうつとりとした柔かな表情を見せたりした。

丁度早春の日の下に、おづ／＼と頭を擡げた小さい草の芽のやうに、いた／＼しいまでに感じ易くなつてゐる須美子の心持を姉らしく劬りながらも、しかし、どうかすると美紗子は皮肉な調子で物を云つてゐる自分に氣がついた。

『本當に早いもんだわねえ。もう須美ちゃんがお嫁に行くんだもの。』

『私、ほんとに早過ぎると思ふわ。』と、須美子は、眞面目な、思ひ込んだ調子で云つた。

『早い方がいゝのよ。——でも、須美ちゃんは幸福ね。まあ、戀女房つてわけなんでせ

う。お金はあるし、屹度大切にして下さるわ。』

そんな事を云はれると、須美子は、もうすつかり途方に暮れて了つて、唯、顔を赤くするばかりであつた。それを見ると、美紗子はある執拗な意地の悪い興味に誘ひ込まれては、擲揄ひ氣味の言葉をちよい／＼と横の方から投げかけるやうにした。須美子はわけもなく泣き出したりするかと思ふと、又、そんな事は耳にもかけぬといふ風に、ぢつと自分一人の考へに耽り入る事もあつた。さういふ須美子の様子が、もう、自分を世の中にたつた一人の姉として、自分ばかりに頼り絶つてゐたもの須美子でない事を、明かに美紗子に思はせた。もう自分の須美子では無くなるのだ——と思ふと、美紗子は、何とも云へず淋しい氣がするのであつた。

又、その身も心もそれから住んでゐる世界も、未だ些とも汚され傷つけられてゐない純



潔な處女として、素直に親の手から男の手に移されてゆく須美子の、初々しい憧憬と、瑞々しい希望とに張り切つたやうな心持を、自分のそれと考へ合せると、美紗子は、自分の痛み、傷き、疲れた心持が厭はしかつた。人目を忍んだり、親を欺いたりする自分の戀が何となく汚れ果てたものゝやうに思はれて、この須美子の純潔さにくらべれば、自分は矢張、いたづらな女と云はれても仕方がない様な氣さへした。而してまた、今はもう苦い涙滓ばかりが残されてゐるやうな自分の戀——最初からあまりに苦しく惱ましかつた自分の戀が、たまらなく呪はしいものに思はれたりするのであつた。

## 六

土用に入ると、毎日八十五六度から九十度以上の暑熱が續いた。母の病氣が次第に悪く

なるのが一日一日と眼に見えて來た。

美紗子は、いつも夏になると起る持病の胃瘵に悩まされたりして、ひどく身體が弱つて來た。で、須美子に社の方を休ませて、手助けをして貰ふ事にした。婚約だけしておいて、婚禮はもう半年や一年先に伸ばしてもいゝと先方でも云つてゐたし、此方にも支度などの都合もあつて、父ははじめさうする意見であつたが、美紗子が強く主張して、秋になつたら早速式を擧げる事にとり極めさせたのであつた。而して、須美子も、此際社を退かせる事に社の方に申し出てあつた。

『須美！ もうお前が親孝行が出来るのも、一寸の間だぞ。本氣になつて阿母様の看病をしなければいけねえぞ。』

父は晩酌の杯を擧げながら、急に吐りつけるやうな調子でこんな事を云ひ出した——



近頃、すつと酒量は減じたが、毎晩の晩酌は不相變缺かす事はなかつた。昔から此の晩酌の時が父の一番機嫌のいい時で、二人の娘に代る代る酌をさせながら、種々おどけた事を云つて家内中を陽気にしたものだつた。二人は——殊に美紗子は父の自慢の娘だつたのでその時分金廻りのよかつた父は、酔つたところを見すまして美紗子が強請る、着物だの、芝居だの、種々の願ひを、皆、『うん、よし、よし。』と肯いて呉れたものだつた。

『高えお酌だぞ。柳橋の姐さんより餘つほど高えや！』紺の腹掛の上に唐棧の半纏などを引ッ掛けた父は、其太つた顔の眼尻に優しい皺をよせて、鷹揚にほゝるみながらこんな戯談を云つたりしたものだつた。だが、今では父も恐ろしく陰氣な氣難かしい人になつて、ちびり／＼やりながらも浮かない顔をして考へ込む事が多かつた。五六年前の手違ひから急に手許がつまつて来る、その上、あすこはお上さんで持つてゐると云はれたほどの母が

病氣で寝ついて了ふ。種々思ふやうにならない事が多いので、今まで殆ど苦勞といふ事を知らずに来た、呑氣な父が、呑んでも呑んでも酔へない酒の苦さを知るやうになつたのだつた。

父は、須美子に酌をさせながら、何かとど／＼と言ひきかせてゐたが、

『いけねえ、もう止さう。』と、二本目を半分ばかり餘して、ごろりと横になつて了つた。

美紗子は母の室の隣の四疊で膝の上で幹子をねかしつけながら、懶く團扇を動かして居た。今朝の激しいさし込みのあとが未だきや／＼と痛んで、身體にもせいがなかつた。肩胛骨の邊などに感ぜられる妙に重苦しい感覺が、ひよつとしたら母と同じ病になるのではないかなどとも思はせた。美紗子は悲しい果敢ない心持の中で、もう長くはなからうと思はれる母の事を考へたり、先刻電話をかけて来たTの事を考へたりした。



日暮前、お隣の砂糖屋の小僧が、電話と云つて知らせて来た時は折よく父は留守だった。胸を躍らせながら出て行つて受話機に絶つて見ると、矢張りからだだった。例の少し吃り氣味の聲に、もだくした胸の中から吐き出される荒い呼吸がきかれるやうな氣がした。美紗子は店の人達を憚る小さい聲で、そのだしぬけに突つかゝつて来るやうなTの言葉に受けこたへをした。

『でもね、とても今駄目なのよ。——ね、そんな事を云はないで頂戴。母がね、今大へん悪いのよ。ええ、大へんいけないのよ。ね、そりや私だつて行けさへすりや行きますわ。だけど本當に今は、手紙書く事さへむづかしいのよ。——あの、一昨日の手紙御覽下すつて。ええ、私も少し身體が悪いの。』そんな事を云つてゐる中に美紗子は自分一人が四方八方からいちめつけられてゐるやうな氣がして来た。

『ね、ですから、そんな事仰しやらないでね。』急に胸が迫つて来て、周囲の人達を氣にしながらもつい涙聲になつて了つたのであつた。

『そんなにお悪いんですか?』と對手の聲はくぐもるやうに聞えた。

『ええ。悪いの、もうこゝ五六日が難かしい位なの?』と、云つて美紗子は、少し誇張し過ぎたと思つたが、しかし、醫師はもう明日をも保證してはゐなかつた。かうしてゐる間にも何時變が来るか判らない状態になつてゐた。

寝て了つた幹子を幌蚊帳の中に入れて、そつと母の室に行つて見ると、母は崩れた結髪を枕の上に亂して、ぐつたりと眠つてゐた。長い病苦が眉のあたりに幽かな響みを作つて、半ば開いた、色の褪めた唇から苦しさうな息が漏れて居た。花好きの母の爲めに、須美子が銀座の露店から買つて来た白ダリアの大輪が、薬瓶に交つた大コップに挿されて、物



惱ましい熱ッぽい空気に喘いでゐた。美紗子は枕元に坐つて、軽く團扇の風を送りながら、その寝れ果て、相變りのした母の顔を打眺めた。その、いつ自分の眼の前から消え去つて了ふか知れない母の顔をぢつと眺めてゐるうちに、種々の思ひ出が、懐しく心の中に群がり寄つて來た。口數の少い、いつも優しく微笑してゐるやうなこの母が、どんなに自分を愛して呉れたか？ どんなに、その柔かな慈愛で自分を包んで呉れたか？

それは七つか八つの時分であつた。美紗子は品川の方に居た伯父の家によく泊りにやられたが、一日二日は邊りの物珍らしさに取紛れてゐても、三日目頃になると、家が戀しくなつて、お臺場の方を見てはしく泣いたりした。すると、丁度その時分を見計らつた様に母が迎へに來て呉れて、「美紗ちゃん、餘り腕白だから伯母さんに上げて了はうと思つたが、矢張止める事にしました。」などと、笑ひ笑ひ云ふのだつたが、美紗子はもう、

懐しさのあまりその懷に飛びついて泣き出したりした——そんな事が、今、美紗子にはまど／＼と思ひ出された。その時分は母も未だ若く美しかった。美紗子は、早く生れた子だつたので、母との年の違ひは、丁度幹子と自分と位だつた。で、一緒に歩いてゐるとよく妹と間違はれたりしたものだつた——。

## 七

結納の取交しが濟んだ日から二三日経つて、母はたうとう息を引きとつた。

くやみ容の應對や、葬式のとりこみやで、何事にも中心になつて働かなければならない美紗子は其悲みを悲しむ隙もない人であつた。昔、父が盛にやつてゐた時分の關係から、會葬者杯も驚く程多かつた。赤坂の高臺にある菩提寺まで、さすがに立秋過ぎの頼りなさ



の見える午後の残暑の日ざしの中を行列はしめやかに続いた。須美子と並んで、俣の上にゆられて行く白無垢の自分の姿を顧みても、美紗子は未だ母の死といふ事を十分に實感する事が出来なかつた。お堂の隅にかしまつて、嚴かな讀經の聲を耳にしながらも、家に歸れば、母は矢張あの部屋に寝てゐるものやうに思はれた。須美子は勿論、近所のお上さん達などさへほろ／＼と涙を溢してゐるのに、美紗子は些とも泣けないのが、自分ながら不思議だつた。

美紗子が本當に泣けたのは、葬式の濟んだ夜、Tに出す手紙の筆を執つた時だつた。精も根もなく疲れ果てゝゐたが、これ丈は書かずにはゐられない氣がして、皆寝て了つてから、そつと起き出して、美紗子は小型の書簡箋を机の上に置いた。

「T様。母はたうとう亡くなりました。私のたつた一人の母さんは、もう此の世にない人

になつて了りました。あんなにまで慈愛深かつた、私の事をいろ／＼と心配して下さつた母さんは……」

こんな風に月並な言葉を並べて行くうちに、今まで何かに抑へつけられてゐたやうな悲しみが急に捌口を見つけて、泉のやうに湧き溢れ流れ漲つて來た。美紗子は、この書簡箋の桃色がぼろと眼の前にひろがるのを感じた。次の瞬間には、涙が頬を傳うて、紙の上に音を立て、落ちた。美紗子はペンを措いて、机に俯伏して了つた。

すこししてから顔をあげた美紗子の、泣いたあとの乾いた眼には、臨終の母の顔がまざまざと描かれてゐた。

「美紗ちゃん！」母はさう云つて、あの悲しい眼つきでちつと美紗子を見上げて、

「幹子を頼みます——ほんとに美紗ちゃんには濟まないね。須美子の事もよく面倒見てや



つて下さい。それから——それから、お前もね——。よく氣をつけてね——。』  
 たしかな言葉でそんな事を云つたが、その深く睜つた眼の裡には、思ひ做しか、たうと  
 う打明けずに了つた心の秘密を覗き込むやうな、又、何故隠してるかと詰る様な——とい  
 ふよりも恨むやうな心持が動いてゐた。

矢張、阿母様は、死ぬまで自分の事を心配してゐて呉れたのだ。私は死ぬまで阿母様に  
 心配をかけてゐたのだ——さう思ふと、美紗子は泣いても泣いても足りないやうな氣がす  
 るのだつた。

『姉さんどうしてゐるの?』

美紗子が驚いて振向くと、須美子がそこにはひつて來てゐた。美紗子は、机の上の書き  
 かけを手早く裏返して、而して涙の顔を灯影からそむけるやうにして、

『何だか頭が痛んで些とも眠れないの?』と、云ひわけするやうに云つた。

『私も些とも眠れないで——。』須美子は、肩を合せる様にしてその傍に坐つて、ちつと  
 姉の顔を覗き込むやうにしたが、その眼には矢張涙が溜まつてゐた。

『私、どうしても、阿母さんが死んで了つたとは思へないわ。うとくしてゐると、須美  
 ちゃん! 須美ちゃん! つていふあの阿母さんの呼ぶ聲がするやうな氣がして——』と  
 須美子は云つた。

『何だかまるで夢のやうね。』

『ほんとに——夢のやうだわ。』

『もう少し。せめて須美ちゃんの御婚禮が済むまで生きてゐて頂き度かつたわね。』

美紗子がさう云ふと、どうしたのか、須美子は、袂に顔をあて、激しく泣きはじめた。



美紗子は自分でも流れる涙を振り拂ふやうにしながら、

『須美ちゃん、そんなに泣くのは止めませう。ね、私だつて悲しいけれど、泣くのは止めませうよ。——でも、あの方が會つて呉れてよかつたわ。須美ちゃんの事だけは、阿母様も安心してゐたわ。』と、なだめるやうに云つた。母の臨終の間に、美紗子は、すこし變則ではあるが、須美子の夫となるべき高野を呼び迎へて一目母に會はせたのであつた。社の方へ電話をかけると直ぐに飛んで來た高野は、此の場合のばつの悪さに一寸狼狽した様でもあつたが、しかし、いかにも若い會社員と云つた様な世馴れた態度で、その枕元に手をつかへたのであつた。

『阿母さん、阿母さん。須美ちゃんの——。』と、美紗子が傍から言葉を添へると、

『高野で御座います、須美子さんを頂く事になりました高野で御座います。』と、高野も

熱心な調子で繰返した。その時は、母はもう、幽かに唇を動かした丈で口は利けなくなつてゐたが、その眼はしかし、はつきりと婚となる可きその若い紳士の顔を寫してゐたに違ひなかつた。而して、一寸うなづくやうに首を動かしてゐた。

美紗子はその時のパセティックな光景を今も眼の前に描き浮べたが、その時でさへかすかに蔭を射さずにはゐなかつたある妬ましさに似た感情が、今また心の中に頭を擡げて來るのが感ぜられた。

『でも、須美ちゃんはいゝわ。——私は、私は本當にお母様にすまない。』さう云つた時美紗子の青くやせた頬には更に新しい涙が流れたのであつた。



葬式やそのあと片附が大體濟んで了ふと、美紗子は心の張りの抜けたせるか、すつかり弱つて了つた。

「須美！ すこし姉さんを休ませてやれ！」父はこんな風に云つて、美紗子を劬つた。而して美紗子が、母の病室になつてゐた奥の四疊に横になつて、懶げに幹子をあやしてゐる傍などに寄つて来て、何時にないしんみりとした調子で、話しかけたりした。

「又、お前が身體あ悪くしちや困るぜ。うちの事なんざ須美にやらせといて、當分ゆつくり休むがいぜ。」

「でも、須美ちゃんも何時までもこゝに居る人ぢやないわ。」と、美紗子は果敢なげな調子で云つた。

「須美の事あ、どうせ少し延ばして貰はなきやならねえ。」と父は呟く様に云つた。

「延ばす事無いと私思ひますね。もう結納も濟んでゐるんですし。」

「いや、さうも行かねえ。」と、父は、いつもの父らしくない分別臭い顔附をして、傷々しく疲れ弱つてゐるその娘の横顔をぢつと眺めるやうにしたが、

「斯うなつて見ると、俺は須美公だつて手離し度く無え氣がする。いゝ縁だから、とりツばぐツちやならねえと思つたんだが、考へて見りや彼奴は未だ年もいかねえし——それにお前もあとで一人ぢやあ大へんだしな。」

「そんな事を云つたつて——。」と淋しく微笑した美紗子の心には、自分の事などは些とも考へて呉れもせず、あんなにまで須美子の縁談にばかり乗氣になつた父の心持に對する僻みがましい感情が、再びかすかに喚び起された。が、美紗子は、さういふ感情の醜さに心の眼をそむけるやうにしながら、



「須美ちゃんがないくても私がやつて行きますから大丈夫ですよ。」さう、きつぱりと答へた。

「お前にや本當に濟まねえ。けどまあ、一二年の辛抱だから我慢してやつて貰ふんだ。何しろその子がお前の手を離れちや育たねえんだから——。」父は、心からの劬（いた）はりを見せ、てそんな事を云つた揚句に、もう二三年前から執拗（しつたう）に申込んで來てゐる、河岸通りの材木店の若主人からの縁談（えんだん）などをもち出した。美紗子を欲しいといふ口は、美紗子の耳に入つたばかりでも、まだ二つばかりあつたが、其中で父は一番その材木店の方に心が傾いてゐるらしく、

「もう二三年は待つてもいゝと云つてるんだからな。」などと云ひ添へた。

美紗子は、自分のTに對する苦い戀を十分に知り抜き乍ら、白々しくそんな話（はなし）を持出し

たりする父の氣持を疎ましく思はずにはゐられなかつた。

「いゝのよ。私、一生どこへも行かずに居ますから。……而して阿母さんの代りに幹ちゃんを育てます。此の子は阿母さんに私が頼まれたんです。」と美紗子は、反抗的な心持をその言葉に籠めてかう云つた。早く乳から離された幹子は、一體に發育が悪く、旺弱（つよわ）な、泣いてばかりゐる様な子だつた。むづがり泣きに泣き寝入して、その腕の中で小さな寢息をたてゝゐる幹子の顔に、美紗子はその頬を寄せるやうにして、

「お前も阿母さんに捨てられて了つたのね。可哀さうな幹ちゃん！」と、心の中で呼んで見たのであつた。

何か中心點が失はれた様な、とりとめの無い淋しい日が続いた。美紗子は何よりも先に



Tの許に走つて、胸一ぱいの悲みを訴へ度い、と思つたが、なか／＼外出の機会が無かつた。で、毎晩のやうに片便りの手紙を書いた。手紙を書いては、その悲しい文句に誘はれて心ゆくまで泣くのが、美紗子には何よりも慰めであつた。

Tから手紙を貰ふ事は、父の眼が怖ろしかつたが、それでも一度丈は下さいと云つて、そつと貰つた手紙には、いろ／＼の事が細かに書かれてゐた。Tは、自分のわがまゝな愛が、いかにあなたを苦しめたか？ あなたばかりではない、あなたのお母さんにそんな心配をかけたときくと、全く、お母さんには申わけがない。けれどおわびしようにも、もうその人はゐないのか？ せめて一目でもお目にかゝつておきたかつた——などと、書きつゞけられてゐた。

## 九

二七日の日には、美紗子は須美子と二人丈で、その赤坂の寺に詣でた。寺は、葵橋の停留場で降りて、靈南坂を上り詰めたところの丁度米國大使館の眞後にあつた。兩側の高い塀の堀越の立樹の蔭影に、お對のパラソルの紫の色をくつきりと浮べて、二人はそのしめやかな細い道を静かに歩いて行つた。而して、寺の門を入らうとすると、そこに、羽織袴の禮装をした若い紳士が待ち受けるやうに立つてゐた。

『あら！』と、須美子が先づ目にとめて、小さい驚きの聲をあげた。それは高野であつた。『阿母さんの墓参りに参つたのですが。——多分あなた達もお見えになるだらうと思ひましてね。』と、高野は物慣れた調子で、どちらにもなく云つた。須美子は眞赤になつて、美紗子の背後に隠れる様にした。

『まあ、左様で御座いましたか。有難う御座います。』と、美紗子は赤くなりながらも、



すぐ姉らしい落着をとりかへして、『あの、お待ち下すつたのでせうか？』

『いえ、今、参つたばかりでした。どうも、後からいらつしやるのがあなた方のやうな気がしましたので、一寸ここに立つて居たんですよ。』と、高野はその短い髭を立てた唇に一寸微笑を浮べた。

『有難う御座います。母も嘸喜びますでせう。』と美紗子は云つた。

それから三人は、門前の花屋へ行つて、花や香を買ひ調べ、罌伽桶を提げた墓守の爺さんを先に立て、寺の背後の墓地の方へ行つた。三四十坪もあらうかと思はれる廣い墓地は、いくつもの區劃に分れて、幾十百の石碑が壘々と重なり合ひ、そこにぢつと人の心を押ししづめずには置かない様な墓地特有のいいんとした氣分を湛へてゐた。

『まあ、どなたか御参りして下すつた方があるわ。こらこんなにお花が——。』先に立つ

た須美子が軽い驚きの調子でさういふのを見ると、成ほど、その新しい卒塔婆の前には、まだ今捧げられたばかりらしい生々とした蝦夷菊の花が、淋しい匂を放つてゐた。

『まあ、どなたか知ら——』さう云ひかけて、美紗子は、すぐその人を思ひあてた。而して一寸胸を衝かれた様にして言葉を消した。

『まあ、誰でせうね。品川の義叔父さんか知ら——。お爺さん、私達の前にどんな人がおまゐりに來たの？』と、須美子は墓守の爺に問ふと、爺は、無雜作な調子で、

『若い男の人でしたよ。三村さんのお墓はどこかと御聞きになるから、教へてあげましたよ。』

『若い男の方つて、何方でせう？ いくつ位の方？』と、須美子は執拗に問ひかけた。

『さあ、いくつ位かね。』と、老爺は桶をそこへ置いて、懶さうに云ひすて去つて了



つた。』

『姉さん、誰でせう？』さう云ひながら振り返つた須美子の眼で、ちつとその蝦夷菊の花に心を吸ひ込まれてゐるやうな、姉の思ひ深さうな横顔を捕へた時、須美子も、漸くその誰であつたかに気がついたのであつた。

墓參を済まして寺を出た時は、もう午に近かつた。

『一寸、私の許へお寄り下さいませんでせうか。』と、坂を降りきつて電車通りに出ようとする時、高野は遠慮深さうな調子で美紗子に云ひかけた。『ここからなら、私の家は、すぐなのですが。』

『はあ。』と美紗子は答へて、

『須美ちゃん、どう？』と小聲で須美子に訊くと、須美子はまた一寸赤くなつて、

『私、どちらでも——』と云つた。

『何かお差支へが御座いますか？』

『いえ、別に何ですけど——』と、美紗子は一寸口籠つた。美紗子は何だか気が進まなかつたが、招かれる者が須美子である以上、而して須美子がそれを拒まない以上、自分の氣持で辭退する事も出来なかつた。

『ぢや、一寸御邪魔させて頂きませうか？ ね、須美ちゃん！』

須美子は、黙つて點頭いた。

電車の中で、美紗子は丁度高野の向うに坐つてゐたので、初めて此の妹の婿になる男を落着いて觀察する事が出来た。その瀟洒とした快活な容貌と云ひ、きちんと整つた服



装と云ひ、いかにも當世向の若紳士であつた。その短い髭で上に乗せた唇から圓い顎のあたりにかけて子供々々した愛嬌があつて、くるりと見開かれた機敏に動く明るい眼附などもいゝ感じがした。——美紗子は、いつの間にか自分のTを、その男と並べて見てゐた、あの、青く痩せた、憂鬱な顔附をした、いつも苛々と氣むつかしいTを思ふと、自分の戀の暗さ、運命の暗さが、しみじみと思はれるのであつた。

此の人は屹度、須美子の爲めによい夫となつて、須美子の一生の幸福を護つて呉れるに違ひない。さう思ひながら、美紗子は、自分の傍にすわつてゐる須美子の、ぼつと上氣したやうな美しい頬を覗いて見た。而して、

「須美ちゃん、矢張、あなたは仕合せだわ。」と、その心の中に呟いたのであつた。

## +

愛宕下の高野の家には、老婢が一人で留守居をしてゐた。獨住には廣過ぎる小綺麗なの住居は、調度類などもすつかり整へられて、何時でも家庭生活を始められる準備が出来てゐる様に見えた。

『さあ、どうぞすつとおくつろぎ下さい。』

庭越しの崖の上から生ひ被さつた青葉の影が、伊豫簾の外に涼しく揺れるその静かな二階で、高野は、冷たい飲み物や果物などを二人に薦めながら、如才ない調子で、ぼつくと世間話などを始めた。その西の方にある郷里の家の事や、老いた一人の母の事などの話も出た。來月の末頃、少し涼しくなつた時分に母も出て來る事になつて居ますが、さうし



たら又お二人で御遊びにいらしつて下さい。——僕の母といふのが、又呑氣でしてね。」などと、高野は云つた。

「阿母さんはもうおいくつなのですか？」と、須美子が問うた。

「さあ、もう五十八——九。たしか九になるでせう。もう婆さんですよ。」と、高野は呑氣さうに笑つた。その中に、前から用意されてゐたらしい午餐などが運ばれた。

「まあ、ゆつくりなすつて下さい。少し涼しくなつてから、お歸りになる方がよう御座んすよ。」などと云つて、高野が連りに引きとめるので、美紗子もつい立端を失つた。而して、高野の話上手が、次第に打解けた自由な氣持に美紗子を誘ひ入れた。いろ／＼と話してゐる中に高野の遠縁に當る或る娘が、美紗子の女學校時代の同窓であつた事などが判ると、話は益々弾んで來て、美紗子は久振に晴やかな氣持になつて聲を立て、笑つたりした。

高野は美紗子にばかり話しかけた。美紗子は、傍に忘れられたやうにしてゐる須美子に氣がつくとひとりで調子にのつて喋つてゐる自分が顧みられた。同時に、美紗子はまた、さうして閑却されてゐる須美子と、閑却してゐる高野との、時々見合せる無言の眼附や顔附の中に、心の底から許し合つた同志の間に見られる、或る安らかに落着いた親しみの通つてゐるのを認めずには居なかつた。而して、美紗子は、此の場合、自分が一種の闖入者である事に氣がつかずには居られなかつた。此の意識が、美紗子を淋しくした。而して心の裡に或る恥を感じながら、口を噤んで了つた。

「どうかなさいましたか？ 急に考へ込んでお了ひになつたぢやありませんか？」と、高野は微笑しながら斯う訊いた。

「いゝえ。」と、美紗子も仕方なしに微笑して、



「何だか少し頭痛がしてまわりましたの。——いえ、何でもありませんの。——さあ、須美ちゃん、そろそろお暇致しませうか。」

須美子はうなづいた。

「まあ、宜しいぢやありませんか、もう少し涼しくなつてからお歸りになつても。」と、

高野は心から名残惜しさうにしてとめたが、

「えい、でも父に黙つてまわりましたから。」と、美紗子は冷やかな調子で云つた。

今朝から時々軽い頭痛に襲はれてゐた美紗子は、高野の家を辭して、午後の日のかんかん照りつける埃つばい町へ出ると、くらくくと眩暈がした。

「須美ちゃん。私、俵で歸ります。眩暈がして、とても電車には乗れさうもないわ。」と、

美紗子は、その電柱の下に立ちすくんでかう云つた。

「めまひがするの？ ひどく？」と須美子は驚いて、その顔を覗き込むやうにして、『さ

こまで出れば俵があるわ。でも歩いて？』

「あゝ、少し位大丈夫よ。」

二人はそろそろと歩いた。

「姉さん！」と、須美子がだしぬけに呼びかけた。

「なあに？」

「あのね、Tさんの事ね。私、私あの人とも相談して、屹度、よくなるやうにしますわ。』と一語二語云ひ漙る様になら須美子は云つた。

「えい、有難う。」と、美紗子は素直な氣持で答へた。

「姉さん！」と、再び呼びかけた時、須美子の聲は涙にうるんでゐた。「こんな事云つて



生意氣だと思つちやいやよ。私、姉さんにはほんとに濟まないし——それにTさんがお氣の毒でならないわ。』

『……………。』美紗子も涙含ましい氣持になつて、黙つてゐた。

その横町を出外れた處に、丁度一臺の辻車があつたので、美紗子はそれに乗る事にした、きたない俥で、車夫もよぼくの爺さんであつたが、それでも威勢よく走り出した。走り行く俥の上で、美紗子は、何となく「逐はるゝ者」のやうなみじめさを感じないではゐられなかつた。——美紗子の眼や耳には、不思議に高野の言葉や顔附などがはつきりと残つてゐた。「姉さん。」などと呼びかけられた時の、あの甘いやうな切ないやうな感情も鮮かに思ひ返された。美紗子にとつても、兎に角高野は好もしい男に違ひなかつた——。

「本當に須美ちゃんは任せだわ。」美紗子はかうした心に繰返した。須美子の前に開か

れてゐる明るい愛の生活、華やかな家庭の生活がいろ／＼と想像された。續いて、ひとりあの貧しい不如意な家にとり残されて、許されぬ戀に苦しみながら生きて行かなければならない自分の將來が對照的に思ひ描かれた。而してこれを一番恥しいものにしてゐた妬みに似た心持が、いつの間にか、美紗子の心を領しはじめた。すると、それを反撥する或る強い感情が、續いて頭を擡げて來た——。美紗子は心の中で云つて見た。「でも、あの人は矢張、淺薄らしい處がある。何だか輕薄才子みたやうな處がある。本當の愛は強い悲しみに裏附けられなければ——さうTさんが仰有つたのは本當だ。私達は苦しい。けれども私達は本當の愛に生きてゐる。」

美紗子は、Tのあの激しい熱に燃えた一双の眼を思ひ描いた。而して、再び心の中で叫んだ。



「Tさん！ 私は苦しい。でも、私は本當に愛せられてゐるのです。Tさん、私達は、いつまでも苦しく悲しく愛し合つて行きませう。」

美紗子の涙含んだ眼には、幌の窓を通して、街路樹の緑が、ぼうと映つては消え、映つては消えた。

(完)

「君よ知るや南の國」(終)

有共者行發者著ハ權作著書本

大正十五年七月三十日印  
大正十五年八月一日發  
昭和六年三月十七日五十一版發行

定價壹圓八拾錢

(「君よ知るや南の國」奥附)

不許複製



著者 加藤武雄

發行者 野間清治

印刷者 渡邊一郎

印刷所 東京市小石川區西古川町二十五番地 中外印刷株式會社

發行所

東京市本郷區駒込坂下町四十八番地

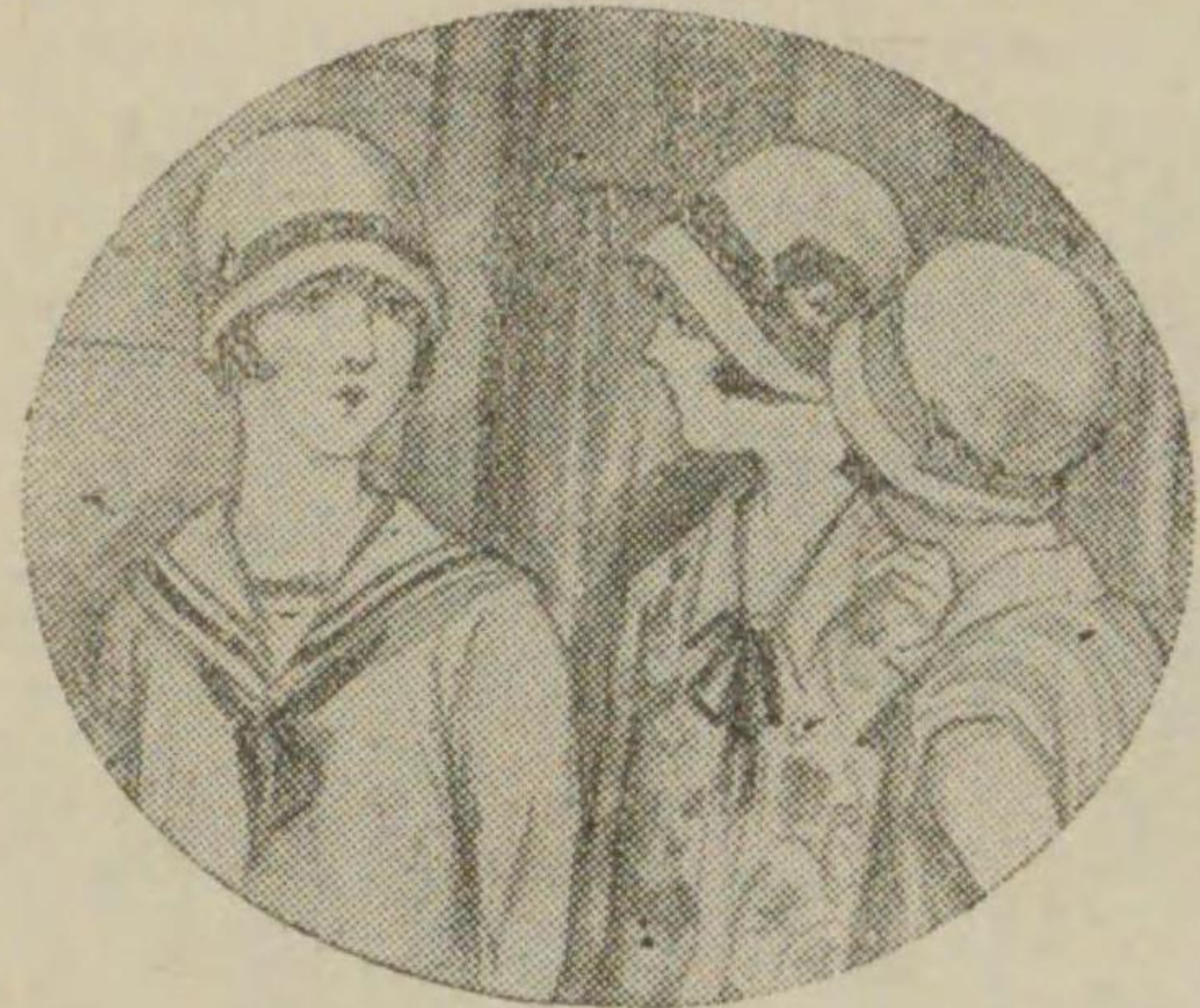
電話 二二二五  
小石川 二五九六  
三九八一  
七〇八八

大日本雄辯會  
振替口座東京三九三〇

所本製地海天



からせでるあに處何はのもふいと福幸  
る分が道るなに福幸ばめ讀を説小のこ



# 毬の行方

此の小説を讀んで、立派な少女になつて下さい!!

佐藤紅緑先生苦心の大傑作  
林唯一先生の美しい挿畫が澤山あります  
定價壹圓五拾錢 (送料十錢)

面白い! 讀めば讀む程面白い!!

負しい家に生れ、たつた一人の父をも失つたかず子さんは此の世で一番不幸な少女でした。獨りぼつちのかず子さんは色んな辛い目や悲しい目に逢はねばなりません。けれども彼女は雄々しく健気に伸びて行きます。そこには優しい禮子さんがあります、矢澤先生や田邊先生があります、痛快な勘ちゃんがあります。

この本を讀むと誰でも感激させられます  
心の正しい人は尊敬される人になります  
先生もおほめになる名作です。ぜひ讀んで下さい。

佐藤紅緑先生著 (定價壹圓五十錢)  
送料十二錢

# 朝の雲雀

何といふ感心な清い物語でせう!

八王子の小學校に、よそめにも羨しい仲よしの梅子、町子、忍の三人がありました。やがて卒業すると、家の事情や運命のために、三人は離れ離れに別れねばなりません。町子も東京へ出れば、梅子の一家も東京へ出ました。あゝその後の悲しい話。彼女たちはどんなに苦勞したり、泣いたりしたこととせう。この三人が手をとり合つて楽しい喜びの日を迎へるのは何時とせうか。これほど感激に充ちた清い美しい物語は全く珍しいと大評判です  
早くく讀んで下さい! 面白くて感激深い傑作です  
この本には、大好きな林唯一先生が特に力を入れてお書き下さつた美しい挿畫が澤山入つてゐます。ぜひ誰方もごらん下さい。

小説を

讀むなら

どんな本を讀んでゐるかを見れば、その人の人格が分ると申します。小説を讀むならば、佐藤紅緑先生の傑作のやうに、面白い上に美しい徳を教へる良い小説を一冊でも多く讀んで下さい。佐藤先生の小説は、學校の先生や父兄方も大變ほめてゐる良い讀物です。





# 嵐の小夜曲

思ひがけぬ災難にあつた上に、親友との仲まで裂かれて東京へ出た氣のどくな少女が、泣くにも泣かれぬほど悲しい事件や苦しい目にたび／＼あひながら、自分を勵ましては母や兄をたすけて勉強する中に、すぐれた音楽の天分をみとめられて成功し、懐しい故郷へかへるまでの涙の物語。

# 級の光り

大人も及ばない感心な行ひの少年や、りつばな心かけの少女などの十二篇の美しい物語。命ををします。恩人につくした可憐な少女や、怨みふかい敵の家を危いところから救つた少年や、玄米パンを賣つて働く二人の少年や、生みの母の顔さへ知らぬ哀れな少女の話など、どの一篇も感涙なしに讀めぬ美談物語集。

# 三つの花

お父さんに亡くなられて、たゞ一人の母親をいたはりながら、愛しい妹たちのために一身を捧げようと決心した長女、學問をはげんで一家の名をあげようと勉強する次女、あどけなく可愛い三女、この白百合黄ばら、紅椿のやうな三人の姉妹が、涙くましいほど離れ合つて立派に育つてゆく感激にみちた物語。

横山美智子先生著

加藤まさ先生装幀・美しい挿繪十二葉

定價 一圓三十錢 送料 十二錢

横山美智子先生著

吉邨二郎先生装幀・二色刷三色刷の挿繪

定價 一圓三十錢 送料 八錢

吉屋信子先生著

田中良先生の美しい装幀とさしゑの本

定價 一圓八十錢 送料 十錢

# 苦心の學友

利口で快活な正三君は、伯爵家の若様の學友にえらばれてお邸にあがつた。ところが若様は怠け者でしかも大のいたづら者です。その上お邸には頭の良い安齋先生がいます。正三君の心配や苦心努力は一通りではない。ともすれば若様にまき込まれてとんでもない大失敗で大笑ひ！ とても滑稽でためになる小説

佐々木邦先生著

河目健二先生装幀・愉快な漫畫七十餘枚

定價 一圓三十錢 送料 十二錢

大倉桃郎先生著

林唯一先生装幀・原色の美しい口繪挿入

定價 一圓三十錢 送料 八錢

大倉桃郎先生著

齋藤五百枝先生装幀並びにさしゑ

定價 一圓三十錢 送料 十錢

# 曉の歌

貧しい家に生れた英一君は早くから意地の悪い叔父の世話にならねばならなかつた。けれども男らしい英一君は人の世話になるのを喜ばず、かたい決心をして獨立し、夜は新聞社の給仕をして働き、晝は元氣で中學に通ひ、母をたすけ妹をいたはり、一生けんめい勉強して偉くなる實に感心なそして熱血の物語。

み國のために目ざましい最期を上げた海軍士官の子の新吉君は、父の血をうけて心正しく強く、どんな苦しいことや困つた事にあつても勇氣を出して奮闘する。負けじ魂をもつて自分ではたらいで勉強し、憎い不良少年を改心させたり、不幸な友をなくさめたり、實に立派な行ひをして出世する感激の立志物語。



# 少年詩集

西條先生の名詩の中から、少年諸君にすかれる傑作のみを集めた名詩集。あるひは白虎隊、樺正行など少年の血を躍らせるやうな勇ましく悲壯な史詩、涙がこぼれる程なつかしい少年の日の思ひ出をうたつたもの、繪を見るやうに美しい海の歌や山の歌、人の情や意氣を讀へたものなど素敵な名篇ばかりです。

# 少年模範文

河目悌二先生裝幀・携帶に便利な本  
定價 八 十 錢 送料 十 錢

# 少年自習畫帖

定價 一冊 二十錢 送料 一冊 四錢

小學國語讀本を作られた五高教授八波先生が、文章のつくり方を誰にも分りよく親切にかいた本。その上に、日本全國から集めた數十萬の少年作文の中から一番すぐれた傑作を五百餘えらんで、模範例として入れ、一つづくに批評してあるので、大へん面白く讀めて知らずく文章も上手になる得がたい良書です。

たゞ見るだけでも面白く美しく、手本にして習ふにもこの上ない良い本です。一流の畫家が數十人、繪は全部で千數百もあります。クレオン、鉛筆、クレパス、パステル、毛筆、ペンなどで描ける水彩畫、淡彩畫、墨畫、略畫、漫畫、素描、貼畫、圖案畫、木版畫などの多種多様、目もさめるやうな畫帖です。

# ハーモニカ樂譜

宮田東峰先生著  
定價 二 圓 送料 十二錢

# ハーモニカ奏法

宮田東峰先生著  
定價 一圓 二十錢 送料 八 錢

# 發明美談

柚木卯馬先生著  
定價 一圓 三十錢 送料 十 錢

ハーモニカで吹ける名曲を百四十篇あつめた名著。國歌、童謡、和曲、歌謠、支那曲、行進曲、小夜曲、舞踏曲、變想曲、圓舞曲、歌劇、序曲などの、ほれなくするやうな美しい曲ばかり、それに吹く時の注意も親切に入れてありますから、この本一冊もつてれば、いつどこでも、どんな場合にも吹く事が出来ます。

名高い宮田先生が、ハーモニカの持ち方から、息の吸ひ方、吹き方、ベースのつけ方、はじめて習ふ人はどんな曲を練習すればいいか、だん／＼むづかしい曲が吹けるやうになるには、どんなのを習へばいいか、と言ふやうな事を、著者が十數年間も研究した實驗から、ごく丁寧に親切に説いた本であります。

活動寫眞を發明したエヂソン、汽車をはじめてこしらへたステュブソン、その他ラヂオ、飛行機、飛行船、電車、電燈、電話、汽船などを發明した人々は何んかに苦心したか。この本には、これらを發明した偉い人々の生ひ立ちや、發明のときの面白くてためになる話、感心な話がたくさん載つてあります。



# 少年讃歌

佐藤紅緑先生著  
齋藤五百枝先生裝幀・挿繪がたくさん  
定價 一圓五十錢 送料 十四錢

志をたて、上京し、書生をしながら勉強する秀才、淺岡亨二、けんくわ好きで正直者の梶原十介。この二人が大東京のまんなかで、正義のため友情のためには死も恐れず、不良少年をこらしたり、あはれな少女をおつたり、牧場で働いたりして正しい道をふみ、つひに希望を達するといふ胸が躍る素敵な大作。

# あ、玉杯に花うけて

佐藤紅緑先生著  
吉野二郎先生裝幀・齋藤五百枝先生挿繪  
定價 一圓五十錢 送料 十二錢

青木千三は親一人子一人の世にもあはれな少年だ。しかし勇氣があり、いつも高い希望にもえてゐる。千三はえらくならう！勉強しよう！と豆腐をうりながら一心ふらん本を讀み、研究し、どんな苦しみともたゝかつて、みごと一高の秀才とうたはれる青年となる……讀んで感激せずにはゐられない大作。

# 紅顔美談

佐藤紅緑先生著  
齋藤五百枝先生裝幀・挿繪がたくさん  
定價 一圓二十錢 送料 十錢

秀才でだんまり屋の兒玉君がゆくへ不明になった。野球選手の佐々木君、冒險ずきの村井君、柔道選手の大室君の三人は親友をさがしに出かけた。奥多摩の山中から、樺太の果にまで行つて、おそろしい悪人どもを相手に手に汗にぎらせるやうな痛快な活躍、全く面白い、そして智仁勇の徳のたふとさを教へる。

# リンカーン物語

池田宣政先生著  
田中良先生の裝幀とさしゑ、寫眞四葉  
定價 一圓三十錢 送料 十二錢

木樵の子から大統領にまで出世した世界の偉人リンカーンの、小説にもないほど面白い物語。貧乏なところなど苦にせず、正義の心あつく、勇氣あり親孝行で勉強家であつたリンカーンが、血の出るやうないろいろの苦勞をして成功し、氣のどくな奴隸たちのために戦争までして活躍する血しほ高鳴る感激の偉人傳

# 少年プリューターク英雄傳

澤田謙先生著  
恩地孝四郎先生裝幀珍しい挿繪がたくさん  
定價 一圓五十錢 送料 十四錢

ナポレオンの名高い愛讀書。ギリシャやローマの有名な英雄、シーザーとかアレキサンダーとかプラトンなどいふ偉い人物の、僅か三十三歳で世界の半分以上も攻めとつた話、泣き虫の少年が大豪傑になつた物語、國のために悪者をほろぼした勇士の働きなど、實に勇ましく面白く、血わき肉をどる十大英雄傳。

# エヂソン傳

澤田謙先生著  
恩地孝四郎先生裝幀、寫眞二十七葉入  
定價 一圓三十錢 送料 十二錢

小學校をたつた三ヶ月でやめさせられ、十二の時から新聞賣子をしたエヂソンが、二千以上といふたくさんの大發明をして、人類の恩人と仰がれるやうにどうしてなつたか。人から低能と笑はれた少年時代から八十餘歳の今日までどんなに苦心しどんなに勉強したか。誰も驚く涙の出るやうな話ばかりです。



龍神丸

かけ離高く勇ましく、荒れ狂ふ大海にのり出した義侠の海賊！舟は小さくとも、きもつ玉は大きいぞ！海國男児の意氣を見よ！祖先のかくした財寶をさがしにだかけて、悪者のために殺された父の志をつぎ悪者とたゝかひながら南洋へ出帆する少年海賊龍太郎の腕のさえ！心は躍る！爽快な龍神丸の活躍！

豹の眼

ほろんだインカ帝國の秘密をさがし、その國をふたゝび起してやらうと、大膽にもたつた一人でアメリカ大陸におしわたつた快少年、黒は杜夫が、おそろしい大盗賊ジャガーの一味と衝突し、身の毛もよだつ大争闘！名探偵デユカン氏の活躍あり、支那老人のたすけあり、實に痛快な冒險小説。

漫畫の罐詰

有名な漫畫ものがたり目玉のチビちゃん、人造人間、ペンキヤ大騒動、愉快な連中、漫畫十二ヶ月、その他まだくたくさん、次から次へとくら見ても見あきない。見れば見るほど面白くなってくる、とても珍妙むるゐるの漫畫が、驚くなかれ千以上、どれもみな天下一品、子供も大人も大よろこび。

高垣 先生著  
山口将吉郎先生裝幀並びにさしる  
定價 一圓三十錢 送料十二錢

高垣 先生著  
土村正壽先生裝幀・伊藤彦造先生さしる  
定價 一圓六十錢 送料十錢

田河水泡先生著  
裝幀も田河水泡先生、奇抜で面白い  
定價 一圓二十錢 送料十錢

破軍星

徳川幕府の末の頃、忠義の志士と一しよに恐しい戦争がおこにてゐる危い場所へゆき、命をすて、御國のために働く美しい少女があつた。名を小百合といつて、巡禮の姿に身をやつし、いくとも白刃の下をくぐつて雄々しくたゝかふその健氣さ、感涙なしには讀めません。かの女の懐の秘密の手紙はいつ渡される

神州天馬俠

織田徳川のために滅ぼされた武田勝頼の子の伊那丸が、うつくしい山大名の娘さくや子と、はかりごとで優れた大軍師のたすけとを受けて、勇ましく富士のすそのに大復讐の兵をあげ、手に汗をにぎらせる大活躍。近畿、中國の地方を大舞臺にして、事件は千變萬化、爽快きはまりない不朽の大傑作です。

血戦記

名将の勇ましい奮戦ぶりを目に見えるやうに書いた本。織公の湊川の決戦、四條畷の正行の奮闘をはじめ、川中島の一騎うち、今川義元のかなしの最期、壇の浦の合戦、七本槍で知られてゐる賤ヶ嶽のたゝかひ、天下わけめの關ヶ原の大合戦、大阪冬の役、夏の役など血わき肉をどる痛快な讀物であります。

行友 先生著  
太田義一先生裝幀・山口将吉郎先生押繪  
定價 一圓三十錢 送料八錢

吉川英治先生著  
第一卷 第二卷 定價各一圓八十錢  
第三卷 定價一圓五十錢 送料各十二錢

川島堰一郎先生著  
口繪さしる入りの美本  
定價 一圓五十錢 送料十錢



# 團子串助漫遊記

少年が、うけつ、團子串助が、江戸から長崎までの長い道中を、奇妙奇手烈な武者しゆぎやうをして大てがら！ かつば征伐をしたり、をろち退治をしたり、ばけものとなつたり、てんぐと大じあひしたり、山賊とけんくわしたり、道場やぶりをしたり、それはく面白。六百以上の繪がみんたきれいな色ずり

宮尾 しげを先生著

装幀も著者、本文も全部美しい色刷  
定價 一圓三十錢 送料八錢

# 輕飛輕助

からだは小さくても、たれにも負けない輕助が、大男の國へいつておどろかしたり、地獄をたんけんしたり、天にのぼつて雷をびつくりさせたり、熊とかくとうしたりして、おしまひには蓬萊國までいき、手柄をたて、七福神にほめられ、鶴につかつて、威張つてかへるといふとても奇抜な漫畫ものがたり。

宮尾 しげを先生著

宮尾しげを先生裝幀、本文も全部色ずり  
定價 一圓三十錢 送料八錢

# 長靴の三銃士

ふしぎなく魔法の長靴、これを頭にかぶつてさへるれば、おぼけが出てこようと何が出てこようと決して負けない。ケンゲキも上手になつて近藤勇もかなはない。競走をすれば一等をとり、學校へ行けば優等生になる。デン子とトン吉とお猿さんは、このふしぎな長靴をかぶつてトテモ滑稽な活躍をします。

牧野 大誓先生著

井元水明先生裝幀、どの頁にも名漫畫  
定價 一圓三十錢 送料十錢

# 父の國と母の國

とほいオランダの國からはるんと日本のおちいさんを尋ねて来たユリコのかなしい物語や、お父さまに孝行つくす昔の阿古太丸のお話や、そのほか「正直小判」や「僕は犬である」などといふ面白い面白いものがたりが十ものつてゐるステキな童話のご本です。くり返して讀めば讀むほどますます面白。

宇野 浩二先生著

寺内萬治郎先生、耳野三郎先生のさしる  
定價 一圓三十錢 送料十錢

# 母いづこ

海をこえ山をこえ、何千里もはなれてゐる、とほい國へお母さんを探して、たつた一人で出かけてゆく孝行少年のマルコ、お金がなくなつて、何も食はずに歩いたり、悪ものにいぢめられたりしながら、勇ましく旅をつとけていつて、とうくなつかしいお母さんを探ねあてるまでの、かはいさうなくお話しです

宇野 浩二先生著

人氣の畫家が五人でかいた挿繪入りの本  
定價 一圓三十錢 送料十二錢

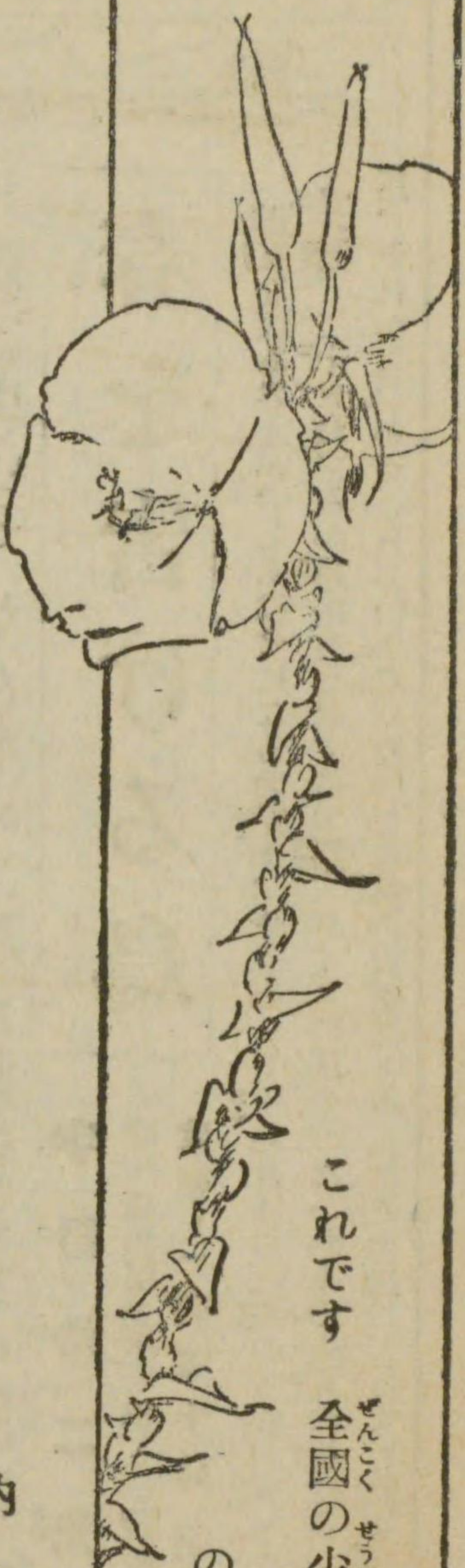
# 春を告げる鳥

正直なばあさんが、しあはせになるお話しや、やくそくを守らなかつた王さまが、大へんかなしい目にあふお話し、二十日ねずみが恩かへしをするお話し、アイヌの國や、たいわんの土人の村にあつた、やさしいお話し、それから、かはいらしい小鳥になつた子供のお話などみんなで十四、どれもこれも面白いお話しばかり

宇野 浩二先生著

寺内萬治郎先生の美しい裝幀とさしる  
定價 一圓五十錢 送料十錢





これです  
全国の少女熱狂  
の大名著

④

# 消えゆく虹

加藤まささを先生著  
定價壹圓八拾錢送料十二錢

乙女の日のあこがれ！ 遺瀨ない悲哀！  
そして清らかな歡びを謳つた物語集！！

その上まさを先生の「消えゆく虹」は初めて発表した珠玉の名作です。  
その上まさを先生の「消えゆく虹」は初めて発表した珠玉の名作です。  
その上まさを先生の「消えゆく虹」は初めて発表した珠玉の名作です。

## 内容

(長篇) 消えゆく虹  
彼女は何處に  
砂文宇  
女王様のお通り  
貴美子と奈美子  
逃げた猿  
薔薇と眞珠  
詩を知らぬ少女  
ローマンズ  
遠い薔薇  
海の恐怖  
エプリルフール  
時間表の白薔薇





Kiko Aoki



